

表紙によせて

ユキツバキ *Camellia japonica* var. *decumbens* Sugimoto

ヤブツバキの変種にあたるユキツバキは、日本海側の多雪地帯を中心に分布する常緑樹である。高さ5～6mに達するヤブツバキに対して、ユキツバキの幹は高さ1～2m程度であり立ち上がらない。枝ははうことが多く、積雪の重みに対して柔軟にしなり、地表に接した枝は発根して独立の個体となるなど積雪に適応した様々な形態を持つ。また、葉に関してはユキツバキの方が薄いなどの相違点が見られる。花に関しては、ユキツバキの花はより広く開き、花弁は薄く、雄蕊は筒部が短く、花糸が黄色に染まることが多い(ヤブツバキの花糸は白色)。花期は4～6月である。これらの形態・生態的特徴は、いずれも日本海側の方が冷涼であることに起因するものと推測される。特に花についてはポリネーター(受粉を媒介する生物)との関係が興味深い。ヤブツバキの花は花弁と雄蕊の基部が互いに合着して筒状となり多量の蜜を蓄えているため、花粉の媒介は主にメジロなどの鳥類によるところが大きい。一方、ユキツバキの花は形態的に鳥媒に適しておらず低温期に開花するため、主にハエ類(黄色に反応する)が送粉しているものと考えられている。まれに結実する果実の内部にはより大型の種子が1～2個(ヤブツバキは2～数個)含まれている。冷涼な地域では、数は少なくとも大きな種子を生産する方が子孫を残すという点で有利なのであろうか。なお、ヤブツバキとユキツバキの分布が接するあたりでは、ユキバツバキという両者の自然雑種が見られる。

日本ではツバキは古代から観賞されてきた。それが盛んになるのは室町時代末で、江戸時代には品種改良が飛躍的に進歩し、中国に輸出されるなどツバキ愛好が流行した。ヨーロッパでは江戸末期にシーボルトが長崎から持ち帰ったものなどをもとにツバキのブームが巻き起こった。このような流行を担った園芸品種の大半はヤブツバキの系統に属するものであるが、複雑な八重咲きの花を持つ園芸品種についてはユキツバキの果たした役割は少なくない。なぜなら、ヤブツバキの花の形態は変異が小さいが、ユキツバキは花弁の枚数や大きさが不揃いなものがよく見られるからである。また、花の変異性がさらに大きいユキバツバキは、園芸品種の作出に大いに利用されたものと推測される。宝珠咲き(八重咲きの中心部が開かないもの)の“乙女”や獅子咲き(中心に大小の花弁が不規則に集まったもの)の“荒獅子”はユキツバキ系の園芸品種と考えられている。(宮内泰之)